

あとがき

今回の展覧会は当画廊恒例のオマーシュ瀧口修造の第7回目で「マルセル・デュシャンと瀧口修造」展である。今年がマルセル・デュシャン(1887-1968)の生誕100年に当たるということを3年前、私の若い友人土渕信彦さんから聞いた時、直ちにこの展覧会を心に決めた。瀧口先生は「デュシャン語録」(1968)等にみられるようにデュシャンとの精神的な交流は極めて深いものがある。1987年のオマーシュ瀧口修造展はデュシャン以外にあり得ないのである。なお、当画廊では1978年10月にマルセル・デュシャン展を開催しており、今回は第2回目である。

この展覧会に際しては、テニィ・デュシャン夫人と瀧口綾子夫人から作品をお貸しいただいた。すなわちテニィ夫人からは瀧口先生からデュシャン夫人に贈られたロト・デッサンの作品(カタログNo.27)ならびにチェスプレイヤーの肖像(カタログNo.13)を、そして綾子夫人からは「大ガラス」に関する瀧口修造メモ、いわゆる「シガー・ボックス」(カタログNo.22)、「デュシャン語録」に関連する作品——J. ジョーンズの「夏の批評家」のオブジェ(カタログNo.29)、同じくドローイング(カタログNo.28)ならびに瀧口修造のオブジェ(カタログNo.26)——を、お貸しいただいた。記してお二人に深謝申し上げるとともに、今後ますますのご健勝をお祈りするものである。

当画廊の展覧会より先に6月10日から7月30日まで——ただし期間中の開館日は水、木、金のみ——東京大学教養学部(駒場)の美術博物館で、デュシャン展が開催されている。いわゆる「大ガラス」——“彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも”——〈東京版〉を中心

にデュシャンに関する資料が展示されている。当画廊の展覧会と併せ、ご覧いただくようご案内申し上げます。

この展覧会の会期は7月1日から28日までとしたが、デュシャンと瀧口修造に関心の深い読者であれば、この両日が特別の意味を持つことにお気付きになるであろう。すなわち7月1日は瀧口修造の命日であり、7月28日はデュシャンの誕生日なのである。この二時点を結ぶ期間を展覧会の会期としたことを一寸うれしく思っている。それにしても偶然にしては出来過ぎで不思議な因縁と思わずにはいられないのである。

この展覧会のためにポスターを作成したが、その原図は瀧口修造の水彩で、「ばらの花」である。“ローズ・セラヴィのために Pour Rose Sélavy”(ローズ・セラヴィとはマルセル・デュシャンの別名)と添え書きのあるラヴリイな作品である。海藤日出男さんによると瀧口先生は「デュシャン語録」(1968)を刊行される際、ポスターを作らなかった様子で、そのために「ばらの花」の習作を数点描かれた、という。これはそのうちの一点である。結局、ポスターは実現しなかった。しかしこの事情を知っている私としては、今回の展覧会のポスターはこの「ばらの花」で行こう、と心に決めていた。部数は「デュシャン語録」と同じく560部とした。

カタログのテキストについては次の3人の方にご寄稿いただいた。すなわち東野芳明“瀧口修造の「シガー・ボックス」——「死後異本」はロビンソンの手で——”、海藤日出男“オブジェ TO AND FROM ROSE SELAVY”、塩崎有隆“瀧口修造と「大ガラス」東京版”である。

東野さんは衆知のようにわが国におけるデュシャン学の第一人者でデュシャンとは生前直接に交遊のあった評論家であり、瀧口修造の直弟子でもある。この人を置いて今回の展覧会のテキストを書く人はいないをお願いした。海藤さんは戦前から瀧口先生と長いお付き合いのあった方で、特に「デュシャン語録」の刊行にあたってはその実質上の責任者であった。塩崎さんは「大ガラス」東京版製作の中心的人物で、その過程で瀧口先生と直接交渉のあった方である。以上の三氏から貴重な論稿、エッセーをいただいたことに厚く御礼申し上げます。

この展覧会の展示作品内容は次の三つの部分から構成される。

1. デュシャンの作品——ジャック・ヴィヨンおよびマン・レイの作品を含む——
2. 「大ガラス」東京版およびそれに関する瀧口修造メモ「シガー・ボックス」
3. 瀧口修造「デュシャン語録」およびその作成過程での関連作品(J. ジョーンズのオブジェ等)

これら作品のうち若干のものについてコメントをつけ加えておきたい。まず最初にデュシャンの作品から。

「階段を降りる裸婦」(カタログNo.1)は1912年の油彩の複製にフランスの5サンチームの切手をはり、Dec.37と日付を入れサインした作品である。これは1937年12月にシカゴのアート・クラブでの、デュシャンとしては最初の個展開催の際、その記念に15~20部作成されたものである。この展覧会にはデュシャン自身はパリにいて出席しなかった、と記録されている。なるほどアメリカの切手ではなくフランスのそれである所以である。

「花嫁」(カタログNo.2)は1912年のデュシャンの油彩を彼の長兄ジャック・ヴィヨンが1934年にカラーアクアチントで版画として作成した初版である。一般に市販された作品は200部限定の「花嫁」(カタログNo.3)である。両者をくらべると色彩が可成り異なり、前者は明るい茶色で、後者は暗褐色である。両版を同時に並べておみせできるのはうれしい。初版をみた人はわが国ではまずいないのではなかろうか。

「ほこりの培養」(カタログNo.7)はマン・レイが、「大ガラス」にほこりが積もったところを撮ったオリジナルの写真で両者のサインがある。1920年の作品で限定はわずか10部である。この写真は16本のローソクの光で1時間露出して撮影されたもので、その間、二人は外へ食事に行っていた、というエピソードを持つ。デュシャンはマン・レイにニューヨークで1915年に初めて逢い、生涯深い友情をもって交遊を続けた。1968年10月2日デュシャンは亡くなったが、その直前、デュシャンと最後の夕食をとにしたのはマン・レイとロベール・ルベル(評論家)であった。そこに両者の深いつながりを感じる。なお、マン・レイの撮ったデュシャン関係の写真を10点展示しているのでご覧いただきたい。

「大ガラス」に関連して「チョコレート・グライNDER」(カ

タログNo.23)を展示できたのはありがたいことであった。この作品は東京版「大ガラス」作成に際し、その予備実験的な過程で作成された試作品である。この展覧会に展示することとなったのは東野さんのサジェッションによるものである。

実のところ、私は東京大学の「大ガラス」を当画廊に持ち込み展示できないか、という今から考えるとまことに無謀な計画を持っていた。実際に東京大学の関係者と接したところ、運搬技術上からも、事務処理上からも極めて困難であることが分り、アッサリとり止めにした次第である。そんな経緯のなかから、この「チョコレート・グラインダー」が出現することになったのである。

瀧口修造メモ「シガー・ボックス」(「大ガラス」東京版作成に関してのメモ)(カタログNo.22)は今回初めて公開されるものである。荒川修作さんから瀧口先生へ贈られたニカラグア産の葉巻たばこの空箱に瀧口先生はメモを62点積み重ねて入れておられたのである。当初これをすべてカタログに載せようかと考えたが、今回は見送り、改めて別の機会を待つこととした。メモの内容は私には難解で、その配列等についても専門家の意見をおききしないと軽々に取扱うことはできないと思われるのである。今回はこのような貴重なメモが存在することのみをお示しすることとなった。

「デュシャン語録」(カタログNo.24)については海藤さんのエッセイに詳しいので重複を避ける。ただJ.ジョーンズの「夏の批評家」のオブジェ(カタログNo.29)は不気味で異様な迫力がある。これは不思議なオブジェである。写真を撮るのが大変困難な作品であった。

さてデュシャンについて一言その概略を述べようと思い、手元にあるデュシャンの解説書をひとわり駆け足で読んでノートをとったりしたが、簡単に私の手におえる作家ではない。書くにしてもっと時間が必要である。それにうまい具合に紙数も尽きてきた(!?)のでやめることとした。

デュシャンについて知りたい方は長い間デュシャンに付き合っておられる東野芳明さんの次の著書を読まれるのが結局一番早道である。

「マルセル・デュシャン」1977年、美術出版社。

「マルセル・デュシャン生涯=作品」1981年、マルセル・

デュシャン展図録、西武美術館。

前者は大著であるが、後者はうまくまとめているので全体像を掴むのには好適と言える。

最後に、何故、お前はデュシャンをとりあげるのかと問われるならば、それは瀧口先生との関係はさておき、デュシャンが現代美術の源流でいまなお生々とわれわれの精神を刺激し続けているからであると答える。戦後美術はデュシャンなしには成立し得ないのである。東野さんは前記の著作のなかで次のように述べておられる。「マス・メディアを主題としたポップ・アートはレティ・メイドの先例なしには考えられないし、とりわけジャスパー・ジョーンズはデュシャンによる言語と視覚の交錯地帯を独自に切り開いていった。「動く芸術」や「オップ・アート」も、ハプニングやイベントも先例がある。表現を最小限に単純化した「ミニマル・アート」はデュシャンの寡黙な身振りから大きな啓示を得た。芸術表現を言語や観念に還元した「コンセプチュアル・アート」は正にデュシャンの申し子だったといっても過言ではない。」と。

このデュシャンについてわが瀧口先生はすでに1938年(昭和13年)に「調革の論理——マルセル・デュシャン」と題しわが国で最初のデュシャンの論文を「みずゑ」1938年10月号に発表しておられる。戦前、環境も悪く、資料も乏しかった時代に、デュシャン論とは驚きであるが、その慧眼と先見性には敬服せざるを得ない。1968年瀧口先生が「マルセル・デュシャン語録」を作られた年にデュシャンが亡くなったのも不思議なめぐり合せと言ふべきであろう。このお二人の希有な仕事と生き方を讃え、ここにささやかではあるが、私としては精一杯の展覧会が開催できたことに深い感慨を憶えるものである。

1987年6月7日

佐谷画廊

佐谷和彦

追記

奈良原一高さんからこの展覧会のためにフィラデルフィア美術館の「大ガラス」の写真4点をお貸しいただいた。この写真は奈良原さんが瀧口先生のサジェッションにより撮られた数十点の作品から選ばれたものである。貴重な記念すべき作品を展示することができたことをうれしく思っている。一言記して御礼申上げる次第である。(6月12日)